

強屈ヲ施シ動脈ヲ壓迫スルノ法ニシテ屢止血ノ効ヲ奏スルヲアリ  
例之ハ橈骨動脈出血ニ在リテハ肘關節ヲ強ク屈曲シ橈尺兩動脈出  
血ニ在リテハ上膊ヲ内旋且ツ後方ニ轉シ兩肢ヲ腰部ニテ相交又シ  
軀幹ト共ニ縛縛ス又下肢ニ在リテ膝關節ニ之ヲ行フキハ後脛骨動  
脈ノ出血停止ス

### 第二連續部動脈結紮法

是レ外科醫ノ尤モ研究スヘキ一大  
手術ニシテ之ヲ行フニハ豫メ脈管ノ走路及ヒ關係淺深ヲ暗知シ如  
何ナル際ト雖モ快手其術ヲ全フセサル可ラサルヤ言ヲ待タズ之ヲ  
行フニ一定適宜ノ部ニ於テ皮膚ヲ切開シ出血動脈ノ本幹ヲ探索シ  
之ヲ周圍組織ヨリ分離シテ結紮スル者トス而シテ是レ英人アネル及  
ヒフンテル Anel & Hunter 兩氏ノ始メテ行ヘル法ニシテアナル氏ハ  
出血部ヨリ僅少ノ距離ニ於テ之ヲ施シフンテル氏ハ稍隔離セル部  
ニ於テ之ヲ施セリ往時ハ重複結紮ヲ用キ其中間ヨリ脈管ヲ兩斷セ

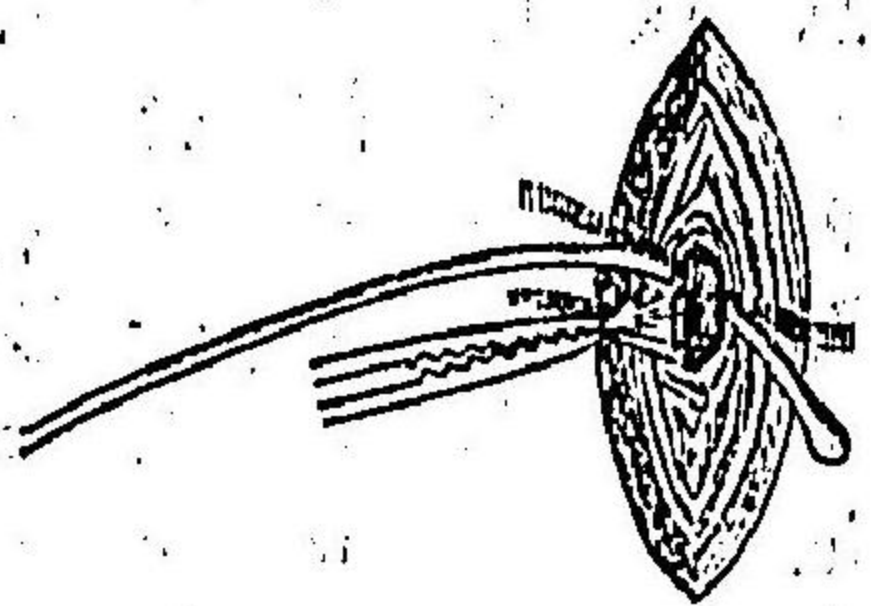
リト雖モ現今ハ結紮ノミニシテ切斷スルヲナシ  
此法ヲ行フニハ皮膚切開ヲ最モ必要ト爲ス是レ皮創不正ナルキハ  
脈管ヲ檢出スルヲ能ハサルヲ以テナリ且ツ其際皮下靜脈ヲ損傷セ  
サルニ注意スヘシ

### 連續部結紮法術式

皮膚切開ハ脈管ノ經路ニ於テシ且ツ之  
ヲ皺襞狀ニ提舉シ刀ヲ鉛直ニ加ヘ皮下結締織ヲ通シテ筋鞘ニ達シ  
解剖鑷子ヲ以テ鞘ノ一部ヲ摘舉シ刀腹ヲ地平ニ加ヘテ之ヲ切截シ  
其截孔中ニ溝消息子ヲ挿入シ皮創ト同徑ニ截割スルキハ血管鞘ヲ  
以テ圍擁セラル、脈管ノ一條ヲ見ル通常動靜脈ハ併行シ靜脈ハ内  
側ニシテ若シ二條ノ靜脈ナルキハ動脈ハ其中間ニ位ス然レモ總頸  
靜脈ト右總腸骨靜脈トハ同名動脈ノ外側ニ存在スル者ト爲ス神經  
ハ通常動脈ノ外側或ハ脈管鞘中ヲ通過スルナリ脈管鞘ハ鑷子ヲ以  
テ一部ヲ摘舉シ注意シテ刀ヲ地平ニ加ヘ鞘ノ一部ヲ切り其孔中ニ



第五十圖  
動脈ヲ分離シ  
糸ヲ其下ニ送  
ル式



薄消息子ヲ挿入シ一仙迷許リ切  
開シ尿管ヲ分離シ動脈瘤針ヲ以  
テ糸ヲ其下ニ送リテ結紮ス(第五  
十圖)動脈瘤針(第五十一圖)ヲ挿入  
スルニハ必ず静脈側ヨリ之ヲ行  
フ若シ對側ヨリ行フキハ針尖ヲ

以テ静脈ヲ損傷スルノ恐アリ

第五十一圖

動脈瘤針



結紮ノ結果 脈

管ヲ經過中ニ於テ  
結紮スルキハ血液

ハ凝固シテ血栓(第五十二圖)ハ生シ一時其循環ヲ遮斷サルモ通  
例本幹ハ數多ノ副枝動脈(ホ)ヲ發シ結紮部(ニ)ノ上流下流(イ)ハ副枝  
ニ由リテ相交通スルヲ以テ血液ハ交通枝ヲ經テ再ヒ本幹ニ流注ス

是ヲ副枝血行 Collateralkreislauf ト稱シ其完全ナルニ於テハ副枝動脈  
漸次擴張シ多量ノ血液ヲ受容スルヲ以テ敢テ血行障害ヲ生セサル  
者トス特リ動脈壁アテロームニ變性スルカ或ハ組織ノ滲潤硬結セル  
キハ副枝動脈ノ擴張シ得サルカ故ニ末梢部ハ貧血冷却シテ遂ニ壞  
死ニ陥ルハ蓋シ免ル能ハサルノ結果ナリ

第五十二圖 副枝血行

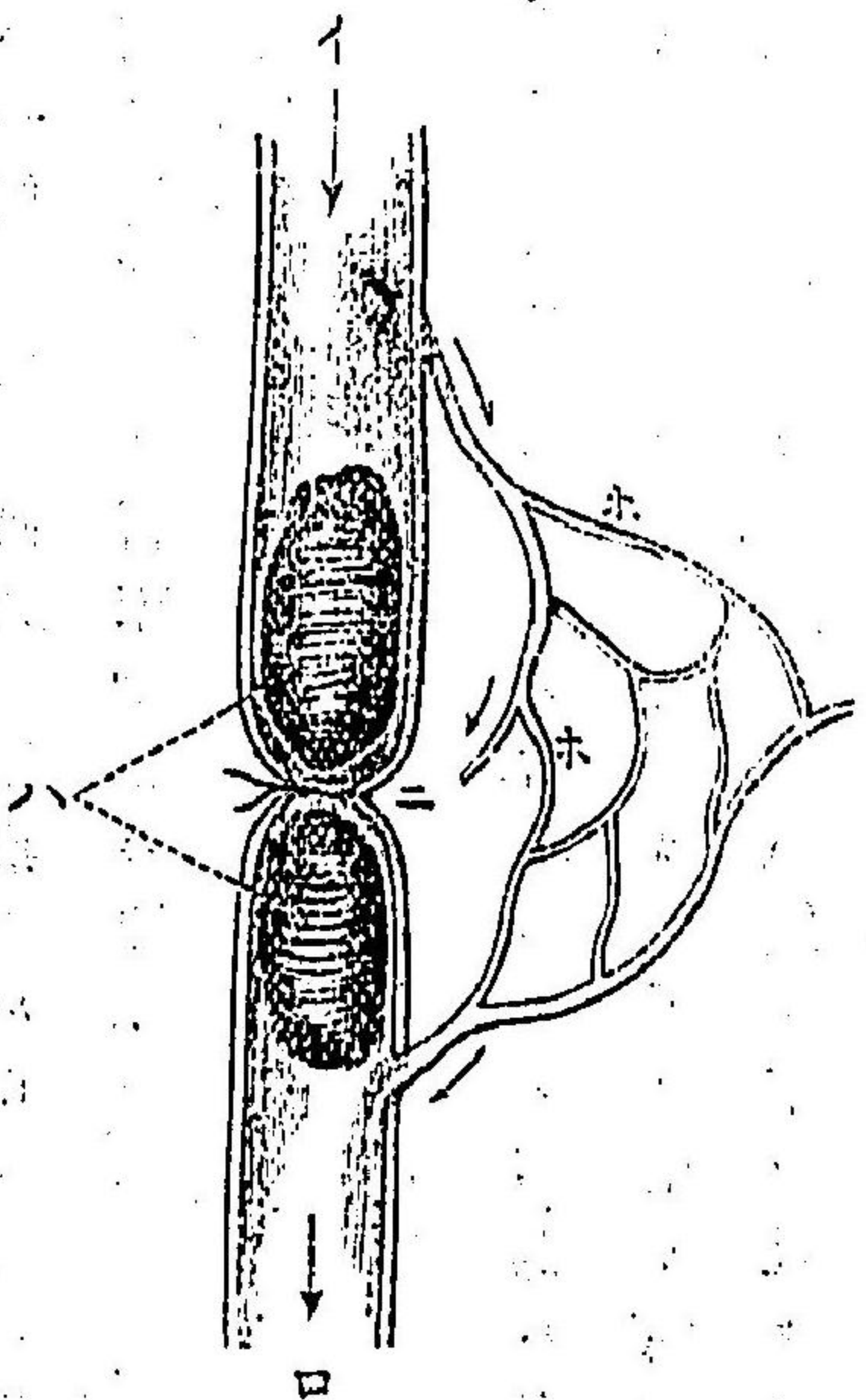
(イ) 結紮部ノ上流

(ロ) 下流

(ハ) 血栓

(ニ) 結紮部

(ホ) 副枝動脈



又或ル臓器ニハ交通枝ヲ有セサル動脈アリコンハイハ氏ハ之ヲ盲



末動脈 Endarterien と稱セリ例之ハ舌動脈ニ於ケルカ如ク其中隔ヲ越テ他側ニ通セサルカ故ニ一側ニ於テ動脈ヲ結紮スルキハ已ニ該側ニ血液ヲ送ルコトナシ又肺肝腎脾等ノ盲末動脈ニ梗塞ヲ來スルハ其末端分布區域ニ於テ楔狀出血ヲ來スコト往々之アリ

人工瀉血法

刺絡ノ適應症ニニアリ

刺絡 往昔歐洲ニ於テ多ク費用セル術ニシテ當時諸般ノ病毒ハ盡ク血液中ニ存セリト想像セルヲ以テ屢之ヲ行ヘリ最近ニ至リ病毒ハ固形組織中ニ存スルノ説ヲ唱ヘシヨリ大ニ其聲價ヲ墜シ且ツ之ヲ行フコト甚タ儲々ナルニ至レリ其之ヲ行フノ適應ハ

(1) 肺血行ノ異常例之ハ肺浮腫ニ於テ之ヲ施ス而シテ其肺浮腫ハ肋骨折傷等ノ爲メニ發シ肺實質中ニ滲出物蓄積スルヲ以テ呼吸困難ヲ起ス此症ニ於テ刺絡ヲ施スキハ大ニ其効ヲ收ム

(2) 腦動脈充血ニ於テ刺絡ヲ有効ト爲ス腦動脈ノ充張スルヤ脈搏強

刺絡法式

實ナル者ニシテ刺絡ヲ行フキハ大ニ其脈性ヲ變ス又腦卒中ノ豫防的ニ之ヲ行フコトアリ此際最モ脈狀ニ注意スルヲ要ス

刺絡ハ通常尺澤ニ於テ中靜脈ニ之ヲ行フ而シテ其刺絡セントスルノ際下垂シテ上膊部ヲ綑縛シ靜脈ヲシテ十分弩張セシメ圓及刀或ハ柳葉針ヲ用キ中靜脈ヲ皮膚上ヨリ斜形ニ刺切シテ瀉血ノ十分ナルヲ要ス而シテ其瀉血ノ量ハ二〇〇―三〇〇ト爲ス若シ出血不十分ナルキハ患者ニ命シテ總指ヲ屈伸セシメ或ハ他動性ニ其部ヲ揉擦スヘシ其瀉血十分ナルニ至レハ上膊ノ綑縛ヲ解ク然ルキハ速ニ止血スル者ナリ此術ヲ行フコトハ消毒ノ嚴密ナルヲ要シ術後直ニ防腐綑帶ヲ行フキハ些少ノ血栓ヲモ形成セスシテ治ス若シ之ヲ怠ルキハ往々有毒血栓ヲ生シテ意外ノ危險ヲ招ク者ト爲ス

水蛭 之ヲ貼用スルニハ始メ其部ヲ洗滌摩擦シ充血セシメ且ツ少シク糖水ヲ塗布スルキハ能ク附着ス又腔内ニ於テ一局所ニ貼用セ



人工蟻針

ンヲ望ムキハ試験管中ニ入レテ之ヲ貼セシム而シテ一回貼用セル水  
 蛭ハ後一年間ハ使用ニ耐ヘス又歐洲ニ於テ使用スル藥用水蛭 *Erigo*  
*do medicinalis* ハ甚ダ大ニシテ日本産ノ者ハ僅ニ其三分一ナリ外國  
 産ノ者ハ一條ニシテ四〇―五〇ノ血液ヲ吸收ス又不潔ノ水蛭ヲ用  
 ヲルキハ其齒痕ヨリ不潔物侵入シ却テ炎症ヲ増劇ナラシムルコト  
 リ故ニ人工蟻針ヲ用ユルニ如カスホイテル―フ氏 *Heurteloup* 人工  
 蟻針ハ始メ圓錐狀ノ圓端ヲ以テ皮膚ニ輕微ノ創傷ヲ造リ次テ吸液  
 銃ヲ宛其部ノ血液ヲ吸出スルノ法ニシテ大ニ効ヲ收メ且ツ防腐的  
 確實ナリ

**亂刺法** 又尖ヲ以テ外皮及ヒ粘膜ヲ亂刺シ出血セシムル法ニシ  
 テ扁桃腺炎及ヒ子宮膈部炎等ニ於テ毛細管ヲ新生スルキ特ニ適當  
 ナリ

**吸角** 之ヲ施スニハ出血性及ヒ無血性ノ別アリ甲ハ皮創ヲ造リ血

液ヲ體外ニ射出セシムル者ニシテ之ヲ血角ト稱シ乙ハ皮創ヲ造ラ  
 ス單ニ吸角ヲ貼シ皮下ニ充血セシメテ他部ノ炎ヲ誘導セシムルニ  
 アリ之ヲ乾角ト稱ス之ヲ行フニハ吸角中ニ水滴ヲ入レ後酒精燈ヲ  
 以テ其角中ヲ温メ角内ノ空氣ヲ稀薄ナラシメテ之ヲ快手適宜ノ皮  
 膚ニ貼スルキハ強力ヲ以テ附着シ吸血ス

輸血法

輸血法 *Transfusion* ノ適症ハ左ノ如シ

- (1) 急性ニ血量ヲ減耗セルキ例之ハ急性出血等ノ如キ者
  - (2) 或ル原因ノ爲メ血球ノ溶崩ヲ來スルキ例之ハ大ナル火傷酸化炭素  
 中毒又炭酸中毒嘔吐仿謨中毒等ニ之ヲ行フ
  - (3) 結核、白血病、敗血病等
- 以上ハ輸血法ノ適症ナレトモ之ヲ濫用スルキハ危險ヲ招ク事カラズ  
 輸送スル血液ハ或ハ人血或ハ動物血ナリ而シテ動物血ハ其血球人血



ニ比スレハ大ナルヲ以テ毛細管ニ入り栓塞ヲ生スルノ恐アリ獨リ  
 牝羊ノ血球ハ人類ノ血球ニ均キヲ以テ供用シ得可シ然レモ一般  
 血ノ優レルニ若カス往時ハ輸送セル血液ハ直ニ減失セル血  
 量ヲ補給スルニ止  
 給スル者ト想像セシモ決シテ然ラス只流動体ノ量ヲ補給スル  
 リ輸送セシ血球ハ一旦盡ク崩落スルモノニシテ主トシテ血  
 壓低下  
 ノ症ニ對テ其効ヲ奏スル者ト爲ス殊ニ近年失血ノ危險ハ直  
 接ニ血  
 量ヲ減セルガ故ニ非スシテ血管ノ容積ト其内容タル血液ノ  
 量ト比  
 例ヲ失ヒ血壓低下シ心麻痺ヲ生シ易キニ因ルノ理ヲ知ル  
 以テ獨  
 リ血液ニ限ラス他ハ中和性液ヲ以テ輸送料ニ供用シ其奏  
 効著シト  
 爲ス

輸液法

Ynfusion

之ニ充ツルハ六〇%ノ食鹽水ニシテ此法モ亦減  
 却セル血量ヲ補給シ其低下セル血壓ヲ亢進セシムルニ在  
 リ又食鹽

水ニ代フルニ乳汁ヲ以テシ之ヲ淋巴管内ニ輸送セリ然レモ  
 乳汁ハ

毛細管中ニ於テ凝固スルノ恐アルヲ以テ食鹽水ノ優レルニ如カ  
 ス  
 人血或ハ食鹽水ヲ輸送セントスルキハ人血ニ在リテハ動脈ヲ選  
 ビ  
 注入スルノ法アリ是レ輸送血液毛細管ヲ通過シ靜脈ニ入り  
 下大靜  
 脈ヲ經テ心臟ニ達スルモノナルヲ以テ若シ凝固スルモ末  
 端ノ毛細  
 管ニ於テ濾過セラレ其心臟ニ達スル頃ニハ純血トナルヲ以  
 テナリ  
 但シ之ヲ行フニハ非常ノ壓力ヲ要スルヲ以テ甚タ實行シ難  
 シ故ニ  
 通常靜脈ヲ選フ者トス食鹽水ニ在リテハ凝固スルノ恐ナ  
 キヲ以テ  
 直ニ靜脈ニ於テ行フモ妨ケナシ  
 輸血法ニ直達介達ノ二法アリ甲ハ甲人ノ脈管ヨリ直ニ乙  
 人ノ脈管  
 ニ輸送スルノ法ト爲ス之ヲ行フニハ甲人ノ脈管ニ小管ヲ  
 挿入シ第  
 二ノ小管ヲ乙人ノ脈管ニ挿置シ其間ハ護膜管ニテ連絡シ  
 テ直達ニ  
 血液ヲ輸送スルノ法ナリ然レモ血液ハ脈管ヲ出テ小管  
 ヲ通過スル  
 ヤ速ニ凝固スルノ性アルヲ以テ甚タ危險ナリ故ニ通常介  
 達法ヲ以



テ安全ナリト爲ス其法ハ血液ヲ瀉出シ人工的ニ纖維素ヲ脱シ再ヒ  
 體温ニ温メ之ヲ靜脈中ニ輸送スルニ在リ  
 食塩水ヲ用フルキハ同シノ體温度ニ温メ行フヘシ  
 輸血法ノ術式 血液ハ通常健康人ノ中靜脈ヨリ四〇〇〇ノ量  
 ヲ瀉出シ硝子盃中ニ盛リ之ヲ四十度——四十一度ノ温湯ヲ盛リタ  
 ル器中ニ入レ硝子桿或ハ茶筌ヲ以テ盃中ノ血液ヲ攪亂シ血中ノ纖  
 維素ヲ分離セシメ布片ヲ以テ之ヲ濾過シ再ヒ之ヲ攪拌シ絹布ヲ以  
 テ更ニ濾過シ纖維素ノ全ク脱却スルノ後之ヲ圓場ニ盛リ三十九度  
 内外ニ保持シ患者ノ中靜脈ヲ暴露シ周圍結締織ヨリ能ク分離シ豫  
 メ三條ノ縫糸ヲ靜脈下ニ通シ置キ反剪刀ヲ取り靜脈壁ヲ斜形ニ切  
 開シ瓣狀創ヲ造リ其創口ヨリ硝子管カニユールレヲ靜脈中ニ挿入シ  
 中央ノ糸ヲ以テ脈壁ト「カニユールレ」トヲ結着シ硝子管ハ護謨管ヲ附  
 着シ其一端ハ血液ヲ盛レル圓場ニ連接シ後圓場ヲ徐々ニ高舉スレ

ハ血液ハ靜脈中ニ侵入ス又「カニユールレ」及ヒ護謨管中ニハ豫メ食塩  
 水ヲ以テ盈クシ置クヘシ是レ注入ノ際靜脈中ニ空氣ノ竄入スルヲ  
 防クガ爲ナリ又血液ヲ盛レル圓場ハ直ニ冷却シ易キヲ以テ注意シ  
 テ他ヨリ温ヲ圓場ニ與エ始終血液中心ニ檢温器ヲ挿入シ三十八九度  
 ノ温ヲ保クシムヘシ

輸送スヘキ血液ノ全量ハ二〇〇〇—三〇〇〇ヲ以テ適度ト爲ス已  
 ニ輸送シ終ルキハ管ヲ通セシ兩系ヲ以テ靜脈ヲ結紮シ「カニユールレ」  
 ヲ去リ該靜脈ヲ兩斷シ而シ消毒シ創口ヲ縫合シテ防腐帶ヲ施ス  
 食塩水注入法ニ於テモ其術式輸血法ト異ナルヲナシ又輸血注射器  
 ヲ使用スルコトアリ然レモ空氣ヲ含有シ且ツ消毒不十分ナルト其應  
 力不定ナルトヲ以テ間害ヲ免レサルヲ以テ之ヲ用ユルコト少ナシ近  
 時ハ食塩水ヲ以テ輸液料ニ充ツルヲ以テ大ニ輕便ナリト爲ス  
 患者ノ狀態 患者ハ通常全身ニ温暖ノ感ヲ覺ユ往々顔面藍紫色



呼吸促進等ノ諸症ヲ發シ其空氣竄入若クハ纖維素ノ肺動脈ニ於テ  
 栓塞ヲ爲セルヲ推知スルコ足ラシムルモ亦暫時ニシテ諸症消散ス  
 自體輸血法 Autotransfusion 急性腦貧血及ヒ心臟麻痺ニ由リテ危  
 險ヲ來スルキニ方リ之ヲ行フモノニシテ四肢ヲ其末端ヨリ「ラネル」  
 帶ヲ以テ纏絡シ血液ヲ中心ニ向テ驅逐スルノ法ナリエスマルヒ氏  
 大ニ之ヲ賞用ス

### 血管壁ノ疾病

脈管ハ内外中三層ノ膜ヨリ成ル其内膜ハ殊ニ薄弱ナルヲ以テ僅少  
 ノ外力ニ由ルモ亦破損シ易シ然ルキハ血液ハ溶解ノ状態ニアラス  
 シテ直ニ其部ニ於テ凝結シ遂ニ血栓ヲ生スルコ恰モ結紮セル脈管  
 ニ於ケルカ如シ時トシテハ内膜ニ變常ナクシテ外中兩膜ノ損傷ヲ  
 來スコアリ然ルキハ只薄弱ノ内膜ノミ存スルヲ以テ其部ハ血壓ニ

抗スルコ能ハス終ニ膨出シテ瘤狀ヲ爲ス之ヲ假性動脈瘤 Aneurysma  
 spuria(第五十三圖)ト稱ス又動脈ノ内膜中膜断裂シテ外膜全キルハ管  
 壁ハ血壓ニ由リテ膨出シ外膜ハ廣ク中膜ト剝離ス之ヲ離間性動脈  
 瘤 A. dissecansト稱ス又三層共ニ破切シ血液脈管周圍結締織中ニ浸  
 潤シ直ニ凝固シ漸々發大シ結締織ハ之ヲ包圍シテ動脈血壓ヲ生ス  
 之ヲ外傷性動脈瘤 A. traumaticumト稱ス又其血壓甚シク増大スルキ  
 ハ近部ヲ壓迫シ壞疽ヲ來スコアリ罕レニハ全肢之ニ罹ル  
 又動脈壁ノ靜脈壁ト同時ニ損傷セラル、ニ由リテ兩管相交通シ動  
 脈血靜脈中ニ注入シ動脈壁若クハ靜脈壁ハ延長シ膨出シテ瘤ヲ構  
 成ス動靜脈瘤 A. arterio-venosum 是レナリ  
 診斷 其腫瘍ニ搏動アルヲ以テ上下四面ヨリ之ヲ觸診スヘシ動脈  
 瘤ハ其何レノ部分ヨリ觸診スルモ同等シ搏動ヲ呈ス之ニ反シテ或  
 ル動脈止ニ腫瘍ヲ生スルキハ同シ搏動ヲ呈スルモ只其上面ノ一



部ニ止マリ四圍ニ於テハ之ニ觸ル、ナシ且ツ動脈瘤ニ在リテハ  
 瘤壁ノ摩擦及ヒ血液ノ盤渦運動ノ爲メニ心收縮時ニ雜音ヲ呈ス其  
 音ハ一種ノ吹樣騷鳴ニシテ時トシテハ開張時ニモ亦之ヲ發シ持續  
 性ナルコアリ又動靜脈瘤ニ在リテモ收縮性及ヒ開張性雜音ヲ呈ス  
 又患部ヨリ末梢ニ於ケル脈搏ハ健側ノ者ニ比スレハ其遅ル、ナ觸  
 知スヘシ

豫後 速ニ適當ノ療法ヲ施サ、ルキハ瘤囊自ラ破綻シ出血ノ爲メ  
 危険ヲ來ス又血腫ヲ生スルキハ漸次増大シ遂ニ一肢ヲシテ壞疽ニ  
 陥ラシムルノ例尠カラズ罕レニハ動脈瘤漸々收縮シテ治ニ就クコ  
 療法 (一) 動脈連續部ニ於テ、中心部ヲ壓定スルヲ以テ最良ト爲テ例  
 之ハ膝膈動脈瘤ニ在リテハ股部ニ於テ壓スルカ如シ指壓法或ハエ  
 スマルビ氏棍棒壓定法ヲ行フヘシ又エスマルビ氏驅血帶ヲ以テ末

122  
 124  
 20

梢端ヨリ患部マテ纏絡スルモ亦可ナリ或ハ之ニ兼テ患部ヨリ中心  
 部ニ於テ驅血帶ヲ纏絡スルコアリ然ルキハ血液ハ其流通ヲ得サル  
 ナリテ瘤内ニ於テ凝固シテ終ニ遏止スル者ト爲ス以上ノ諸法若シ  
 効ナキキハ其動脈ヲ中心部ニ於テ結紮シ猶其驗ナキキハ動脈瘤腫  
 ナヲ摘出ス可シ即チ外部ヨリ切開シ凝血ヲ除去シ瘤ノ兩端ヲ結紮ス  
 殊ニ動靜脈瘤ニ在リテハ結紮及ヒ摘出チ最良ト爲ス

動脈炎

動脈炎 Arteritis ニ急慢二性アリ脈壁三層中殊ニ内膜ハ其炎ニ罹リ  
 易シ之ニ次テ中膜ト爲ス甲チ内膜炎 Endarteritis ト稱シ乙チ中膜炎  
 Mesarteritis ト稱ス而シテ外膜炎ハ甚タ少ナシ靜脈ニ在リテハ之ニ反  
 シテ其外膜炎ヲ發スル者頗ル多ク之ヲ靜脈周圍炎ト稱ス淋巴管モ  
 亦然リ  
 急性動脈炎ハ甚タ罕レニシテ多クハ他部ヨリ波及スル者ナリ屢切



斷術後防腐不十分ニシテ化膿ヲ生セシキニ起リ或ハ周圍ニ膿窩アリテ化膿コッケンノ刺衝ニ由リテ來ル然ルキハ炎症外膜ヨリ中膜内膜ニ及ホシ黄色ノ斑點ヲ生シ内膜ハ溷濁シ細胞浸潤ヲ生ス脈管壁ハ一般ニ脆弱ト爲リ破壊シ易ク切斷面ヨリ後出血ヲ起スト甚カラス其他急性傳染病ニ罹リ本患ヲ發スルコトアリ例之ハ腸窒扶斯等ニ在リテ往々見ル所ニシテ就中心臟内膜炎及ヒ筋質炎大動脈炎等ヲ發ス

慢性動脈炎ニ數種アリ

第一畸形性動脈內膜炎 Endarteritis deformans, Atherom 一名動脈

壁糜粥樣變性ハ老人殊ニ酒客ニ來ル疾病ニシテ内膜ノ肥厚ヲ起ス其肥厚セル部ハ屢軟化シテ糜粥狀ヲ呈シ或ハ硬結シテ罕レニ軟骨樣ノ硬度トナルヲ見ル糜粥樣變性ハ屢石灰變性ニ移リ或ハ其崩潰ニヨリ組織ノ欠損ヲ來シ糜粥樣ノ潰瘍ヲ呈ス而シテ此際中膜ノ筋織

維モ亦脂肪變性ニ陥ル者ト爲ス此變性ハ動脈系中大動脈弓ヨリ細小動脈ニ至ルノ間ニ發シ易シ故ニ糜粥樣變性ハ一ノ動脈內膜炎ニシテ細胞浸潤ヲ呈シ後結締組織增生シテ遂ニ脂肪變性石灰變性等ノ如キ退行變性ヲ來ス者ナリ此内膜炎ノ爲メニ動脈壁ハ彈力ヲ失ヒ血壓ニ耐エヌンテ自ラ擴張シ動脈瘤ヲ形成スルコトアリ腦動脈ハ屢此變性ニ陥リテ動脈瘤ヲ生シ腦卒中ノ原因ヲ爲ス其他内膜粗糙ト爲ルヲ以テ血行系中ノ抗抵増加シテ爲メニ心左室ノ肥大ヲ致ス或ハ内膜面ノ肥厚シテ粗糙ト爲ルニヨリ血液凝着シテ血栓ヲ生シ管腔閉塞シテ其血管分布ノ區域内ニ於テ組織ノ壞疽ヲ來スコトアリ例之ハ老人脱疽ニ於テ足趾ノ壞疽ニ陥ルカ如キ是レナリ

診斷 動脈ノ彈力減シ紆曲硬固ノ索狀ニ變ス而シテ五十歳以上ノ老人ニ多シ

原因 ハ未詳ニ屬スト雖モ殆ント生理的ニ來ル亞爾爾個保兒、煙草等



ニ原因スルノ説アレハ確實ナラス  
 第二梅毒性動脈內膜炎 *Endarteritis syphilitica* ハ第三期梅毒若クハ先天性梅毒ニ由リテ來ル所ノ動脈炎ニシテ歐洲ニ於テハ多ク腦動脈ニ發シ終ニ破裂シテ腦卒中ノ原因ト爲ルヲ屢之レアリ本邦ニテハ多ク四肢動脈ニ發シ所謂特發脫疽 *Gangraena spontanea* ナ將來ス余ハ該病ノ梅毒性動脈炎ニ由來スルヲ講究證明セシヲ以テ今爰ニ該病ノ本態ヲ詳述シ其動脈變狀ヲ明ニスヘシ特發脫疽ハ通常偶然單發シ或ハ些少ノ誘因ニ由リテ初メ足趾尖端ノ皮膚腐裂及ヒ潰瘍ヲ生シ健全部ト分畫シテ患部ハ壞疽ニ陥ル者ト爲ス本病ハ常ニ足趾ノ冷感若クハ知覺異常ヲ以テ發現シ次テ潰瘍ヲ生シテ疼痛ヲ發ス而シテ該症ハ或ハ適宜療法ニ由リテ平癒シ或ハ益進行シテ遂ニ下腿及ヒ上腿ニ蔓延スル者アリ  
 動脈ハ毎ニ固有ノ變狀ヲ呈シ股動脈ニ在リテ脈搏屢々欠如シ又屢々硬

固ナル索條ニ變シ其變化ノ度ニ隨テ強弱ノ脈搏ヲ呈ス或ハ屢々動脈音高調ト爲リ罕レニ收縮性雜音ヲ聽取ス然レモ心音正調ニシテ毎ニ異狀ナシ間ニ心肥大ヲ呈スルヲアリ  
 橈骨動脈ハ屢々幽微ノ脈搏ヲ呈シ或ハ全ク欠如スルヲアリ斯ノ如キ際ニ在リテハ容易ニ肥厚セル動脈壁ヲ觸知シ得ヘシ又幾多ノ患者ニ在リテハ四肢動脈脈搏ハ交叉性ニ欠如スルヲ見ル即チ左側股動脈搏ノ欠如セルキニ右側橈骨動脈脈搏缺如スルカ如キ是レナリ  
 本病ハ經過甚々緩慢ニシテ往々數年ニ亘リ殊ニ男子ニ多シ年齡ハ屢々少壯ノ者ニ發シ最モ中年ノ者ニ來ル是レ老人脫疽 *Gangraena senilis* ト異ナル所以ナリ余ノ實驗セル者ノ中三十七歳ヨリ四十七歳ニ至ルノ間ニ最モ多シ又本病ハ多クハ偏側ニ發シ殊ニ左側ニ多シ  
 動脈ハ其全壁ニ變化ヲ呈シ初メ内膜ハ細胞增生ニ由リテ肥厚シ管腔全ク閉塞シ内ニ細胞ニ富メル新組織ヲ以テ充填ス此新組織中單



ニ狹隘ナル空隙ヲ殘シ二三ノ細小動脈ヲ生ス蓋シ内膜肥厚シ表面  
 粗糙ト爲ルヲ以テ血液ハ沈着凝固シ血栓ヲ形成シ有機轉化ヲ營爲  
 シ全ク新組織ニ變シ毛細管ヲ新生セルニ由ル  
 弾力膜ハ彈力纖維ノ增生ニ由リ著シク肥厚シ延大ナル皺襞ヲ爲ス  
 又屢許多ノ彈力膜ヲ形成シ增生セル内膜組織中ニ光輝ヲ有スル彈  
 帶ヲ見ル其他彈力膜中ノ結締組織甚シク増殖シ稀レニ硝子樣變性ヲ  
 營爲セリ  
 中膜ハ毎ニ肥厚シ筋纖維甚ク増殖ス然レモ管腔閉塞シテ久シク血  
 液ノ流通ナキハ筋纖維萎縮消耗シ中膜却テ菲薄ト爲ル者アリ  
 其他内膜中膜及ヒ外膜周圍組織ハ圓形細胞浸潤ヲ呈シ殊ニ毛細管  
 周圍ニ於テ著シ加之屢管壁ニ護謨性肉芽ヲ生シ増息セル内膜組織及ヒ  
 中膜ハ密ニ浸淫破壞セラレテ内膜組織中膜筋纖維及ヒ彈力膜ハ大  
 半消耗ニ歸ス又外膜周圍組織ニモ同様ノ護謨性肉芽ヲ生シ限局性

圓形細胞浸淫ヲ呈ス

右記述セル如ク本病ニ於ケル動脈變化ハ全壁ニ發シ三層盡ク侵サ  
 レ管腔全ク消失シ屢護謨腫ヲ發生スルヲ以テ余ハ此種ノ炎ヲ名ケ  
 テ梅毒性閉塞性動脈炎 Arteritis obliterans syphilitica ト稱シ其護謨腫  
 ナ發スル者ハ特ニ護謨性動脈炎 Arteritis gummosa ト名ク

第三結核性動脈炎ハ結核患者ニ來リ管壁ニ結核ヲ生ス護謨性  
 動脈炎ト區別スルニ困難ナルモ其全身結核ノ併發症タルヲ以テ知  
 ルヲ得ヘシ

療法 梅毒性動脈炎ニ在リテハ驅梅毒療法ヲ施シ沃土加里ヲ内服シ  
 同時ニ外用トシテ水銀軟膏塗擦ヲ行フヘシ結核性動脈炎ニ在リテ  
 ハ結核療法ヲ施スヲ要ス



### 動脈瘤

動脈瘤 Aneurysma ハ血管壁ノ疾病或ハ損傷ニ由リテ血管其固有ノ  
彈力ヲ失ヒ血壓ノ爲メニ擴張セル者ヲ云フ而シテ分テ眞性及ヒ

第五十三圖

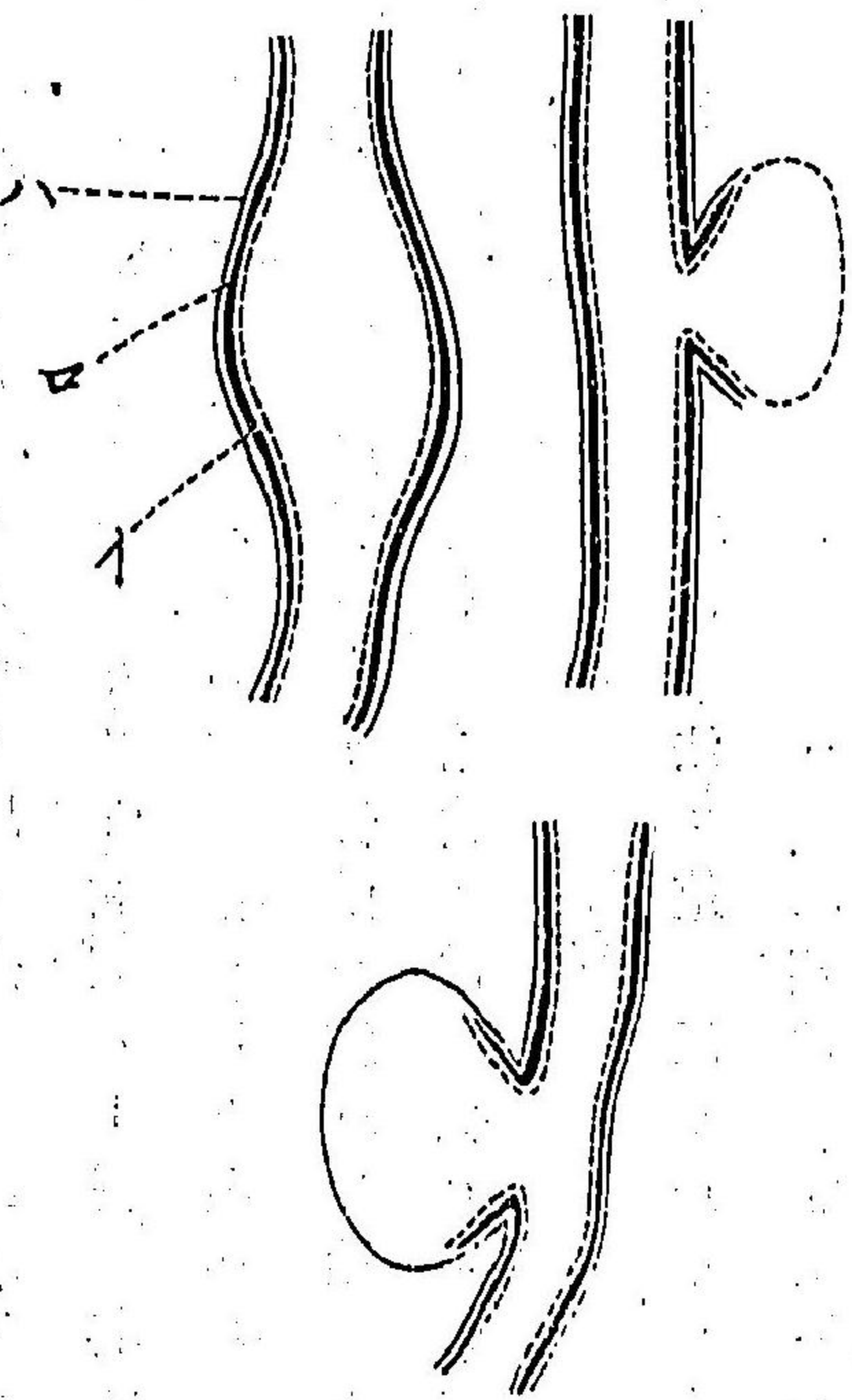
眞性動脈瘤

假性動脈瘤

(イ) 内膜

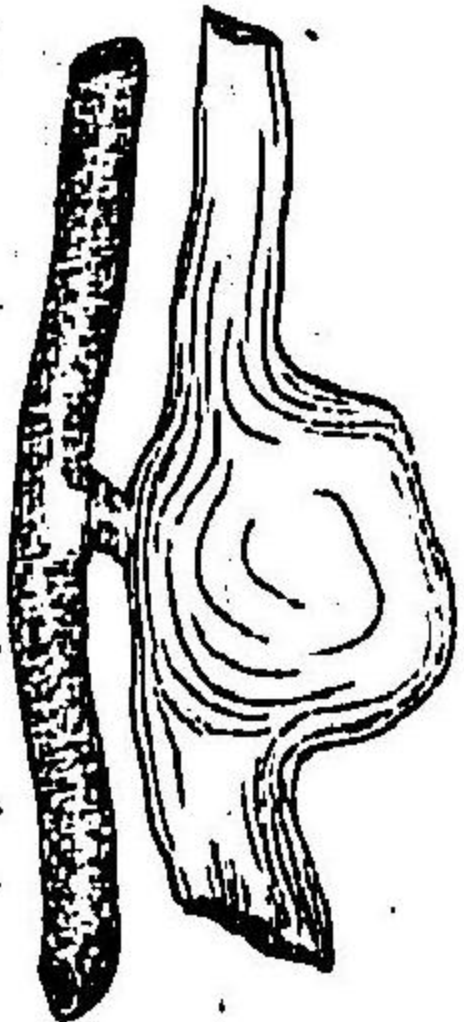
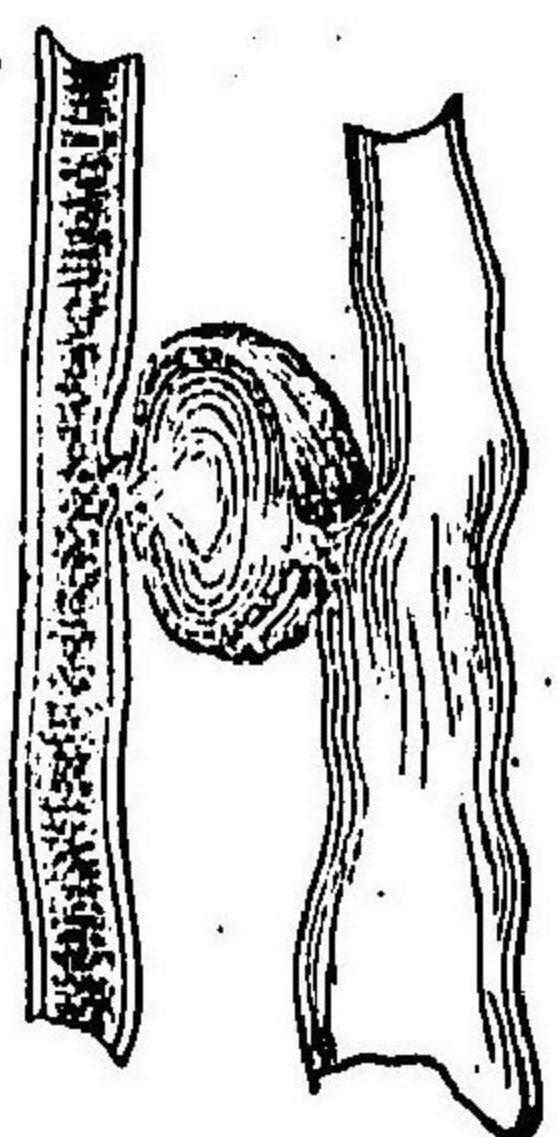
(ロ) 中膜

(ハ) 外膜



假性ノ二種ト爲ス眞性動脈瘤ハ動脈壁尙ホ三層有テ具スル者ニシ  
テ假性ニ在リテハ其一層或ハ二層ヲ以テ成ル者ナリ(第五十三圖)又

三層共ニ欠如セル者ヲ外傷性動脈瘤ト稱ス其他動脈瘤ハ屢シテ靜脈瘤  
ト相連絡ス是レ多クハ尺澤ニ於テ刺絡ヲ施スノ際誤テ動脈ヲ損傷  
シ爲メニ血液ノ動靜脈中ニ灌流シ心収縮期ニ於テハ動脈血液血中ニ  
入り開張期ニ於テハ靜脈血其中ニ侵入シテ其所含ノ血液ハ動脈及  
第五十四圖 動靜脈瘤



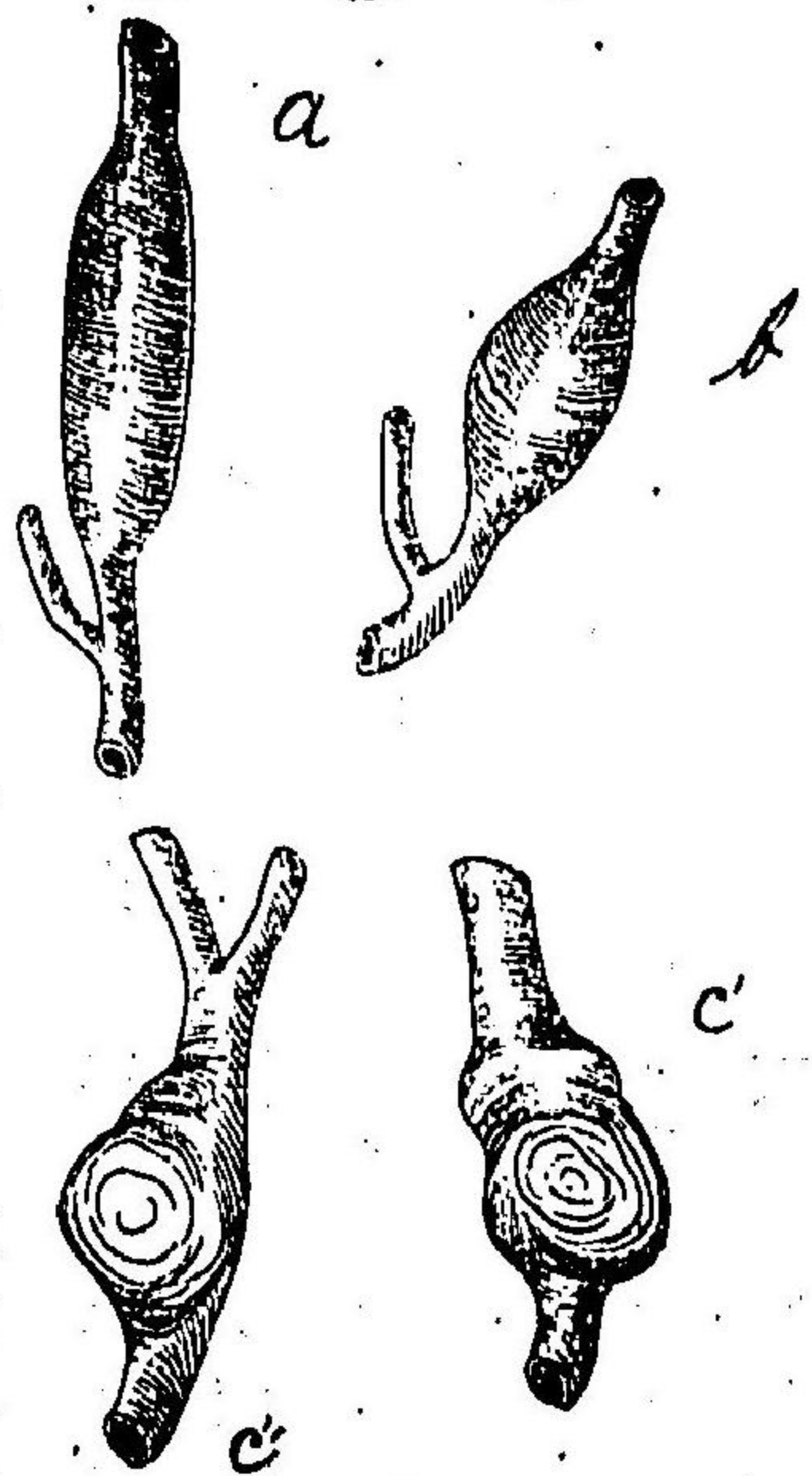
ヒ靜脈血ノ混合ヲ來ス者ナリ之ヲ名  
ケテ動靜脈瘤(第五十四圖)ト云フ而シ  
テ動脈ノ一部主トシテ擴張セル者ト又  
靜脈ノ擴張セル者トノ二種アリ  
眞性動脈瘤ハ其形狀ニ從ヒ更ニ三種  
ニ區別ス第一紡錘狀動脈瘤第二圓柱  
狀動脈瘤第三囊狀動脈瘤(第五十五圖)  
是ナリ眞性動脈瘤ハ英國及ヒ米國ニ  
尤モ多ク本邦ニ少ナシ而シテ其大ナル血



管ハ屢本病ニ罹リ殊ニ大動脈及ヒ大動脈弓ニ發シ膝關動脈、股動脈、腹部大動脈、外腸骨動脈、總頸動脈、鎖骨下動脈等ノ如キハ之ニ次ク者ナリ  
 原因 畸形性動脈内膜炎ハ屢其原因ヲナス然レモ糜爛様變性ハ老人ニ多ク動

第五十五圖

- (a) 圓柱狀動脈瘤
- (b) 紡錘狀動脈瘤
- (c') 囊狀動脈瘤



人ニ多ク動脈瘤ハ壯年ノ輩ニシテ三十歳ヨリ四十五歳ノ間ニ多シ又梅毒性動脈炎ニ由リテ

來ルアリ又外傷ニ因ルノ著キヲ以テ見レハ其種々ノ原因ニ在リテ來ル者タルヤ明ナリ

症候 動脈瘤ニ著明ノ症狀ハ其搏動及ヒ雜音是レナリ而シテ其搏動ハ心收縮ト一致スル者ニシテ周擁ヨリ之ヲ觸知スルヲ得ヘシ而シテ此搏動ハ動脈上ニ位スル他ノ腫ト鑑別スルヲ要ス即チ乙ニ在リテハ其搏動ハ只上部ニ存スルノミニシテ四方ニ傳播スルヲナシ而シテ其雜音ハ血液ノ動脈壁ニ摩擦スルニ由リテ生スル者ト爲ス其他罕レニ血管ニ富メル肉腫包蟲囊腫ト誤認スルヲアリ

動脈瘤破裂シテ死ヲ致ス

動脈瘤ハ漸々増大スル者ニシテ其周壁非薄ト爲リ遂ニ破裂シ、危險ハ大出血ヲ來ス又動脈瘤ノ漸々増大スルニ由リ其近傍ノ組織ヲ壓迫シテ屢骨質ノ消耗ヲ來ス例之ハ大動脈瘤ニ於テ胸骨把柄部ヲ侵蝕シテ皮下ニ現出シ遂ニ非薄ノ皮膚ヲシテ壞疽ニ陥ラシムルカ如シ或ハ神經ヲ壓シテ疼痛若クハ麻痺ヲ將來ス而シテ一朝破裂スルキハ爲メニ大出血ニ陥リテ死スル者ト爲ス

豫後 瘤囊ノ増大スルニ從ヒ遂ニ破裂ヲ來ス然レモ小動脈瘤ニ在



リテハ血栓ヲ生シテ自ラ治スルコトアリ

**療法 第一連續部壓抵法** ニシテ就中(a)指壓法ヲ最良ト爲ス通常六時間—十二時間ヲ持續スヘシ若シ其久用ヲ要スルモハ(b)器械ヲ用ユルヲ可ト爲ス而シテ之ニ種々ノ器械アリト雖モ其最モ便ナルハエスマルヒ氏彈力帶ナリ而シテ指壓及ヒ器械ヲ以テ壓迫ヲ施スモ三日ヲ超ユヘカラス蓋シ動脈瘤破裂ノ虞リアレハナリ且ツ多クハ患者持續性壓迫法ニ耐ニズ劇痛ヲ發シ或ハ四肢ノ壞疽ヲ來スコトアリ

**第二間斷彈力性壓抵法** ニシテエスマルヒ氏彈力帶ヲ以テ動脈瘤ノ上下ヲ壓抵スルノ法ナリ是レ四肢動脈瘤ニ於テ施シ易ク該法ハ血液ノ瘤囊中ニ輸入ヲ防止シ且ツ其還流ヲ絶スルニ由リ瘤囊内ノ血液ヲシテ凝塊セシムルノ目的ナリ此法ハ一回十五分間持續シテ一日三回反覆シ數日間連用シ往々良結果ヲ得ルコトアリ



**第三電氣刺針法** 二針ヲ瘤囊中ニ刺入シ導子ト爲シ電氣ヲ流通スレハ血液分解シテ其凝固ヲ促ス本邦ノ銀製按摩針ハ最モ之ニ適スルカ如シ

**第四結紮法** 動脈瘤ノ中心端ニ於テ結紮ヲ施シ其瘤内ニ血液ノ漚流スルヲ絶テ瘤囊ヲ萎縮セシムルノ法ニシテ初メアチル氏此法ヲ瘤囊ノ近部ニ於テ施シ後フンテル氏ハ遠隔部ニ於テ結紮セリ此等ノ方法ニヨリテ一旦治ニ就クモ再ヒ結紮部ニ於テ新ニ動脈瘤ヲ構成スルコトアリ或ハ結紮絲ノ脱落ニ由リ出血ヲ來シ又四肢ノ大ナル動脈ニ於テハ副血行ノ完カラサルヨリ四肢ノ壞疽ニ陥ル等ノ不利アリ是レ殊ニ動脈壁ノ彈力減少シ存スルモニ於テ然リ

**第五動脈瘤摘出法** 是レ成效ノ極メテ確實ナルノ法ニシテ壓迫或ハ結紮法ノ奏効セサル際ニ行フ者ト爲ス最モ古法アンチールス氏Antylusノ法ニシテ動脈幹ヲ其瘤囊ノ上下ニ於テ結紮シ且ツ其瘤



瘻ニ開口ナル側枝ヲ悉ク結紮シタル後切開シ且ツ之ヲ摘出スルニ  
 在リ通常エスマルヒ氏驅血帶ヲ用ヰテ手術スルヲ尤モ便利ナリト  
 ス即チ彈力帶ヲ以テ驅血シタル後切開シテ瘻内ノ凝血ヲ去リ消息  
 子ヲ瘻瘻ノ上下ニ挿入シテ以テ動脈瘤ノ限界ヲ示シ其輸出枝ヲ悉  
 ク結紮シ然ル後瘻蓋ヲ摘出ス  
 最近無名動脈瘤ニ於テ其輸出動脈即チ鎖骨動脈并ニ頸動脈ノ  
 結紮ヲ施行シテ善良ノ成績ヲ得タリ而シテ此二動脈ヲ結紮スルニハ  
 之ヲ二回ニ施行スルヲ良ト爲ス  
 第六藥液注入法 通常一半格魯兒鐵液ヲ瘻中ニ注入ス其他麥奴越  
 幾斯脂肪或ハ蠟ノ注射ニ由リテ血液ノ凝固ヲ促シ人工的ニ血栓ヲ  
 生セシメ其有機化轉シテ次テ收縮シテ治ニ就カシムルノ法ナリ然レ  
 此法ハ血栓ノ腦及ヒ肺動脈ニ至リテ拮止シ以テ呼吸困難人事不  
 省等ヲ來ス危險アルヲ以テ方今ハ之ヲ施スコトナシ

又細針ヲ以テ瘻蓋ヲ穿通シ縫糸ヲ其内ニ留メ以テ血栓ヲ生セシム  
 ルノ法アリ然レ此亦危險ナルヲ以テ今ヤ殆ント之ヲ廢止セリ  
 又二三年前ハ刺絡ヲ施シ多量ノ血液ヲ瀉出シテ血液ヲ稀薄ナラ  
 シメ以テ凝血ノ形成ヲ催進シタルコトアルモ亦全ク之ヲ廢セリ



静脈ノ疾病

静脈ノ損傷

静脈壁ノ一部ニ損傷ヲ受クルキハ其全斷セルヨリ却テ出血多キヲ以テ手術ノ際ニハ宜シク此ヲ兩斷スヘシ然ルキハ兩端收縮シテ管腔狹小ト爲リ出血自ラ止ム大ナル静脈ニ在リテハ結紮ヲ要ス但シ動脈ニ於ケルト異ナリ壁ノ一部分ヲ結紮スルノ法ニシテ之ヲ側壁結紮ト云フ蓋シ血栓ノ生スルヲ恐ル、ナ以テナリ

静脈中ニ空氣竄入

静脈ノ損傷ニ在リテハ空氣ノ竄入スルヲアリ殊ニ頸部及ヒ胸廓周圍ノ静脈ニ於テ然リ若シ空氣静脈中ニ入ルキハ血液ト共ニ循環シテ下大静脈ヲ經テ心臟ニ入り危険ノ症狀ヲ呈ス例之ハ頸部ノ手術ニ於テ外頸静脈ヲ損傷シ患者ハ深ク吸氣スルキハ空氣音ヲ發シテ静脈ニ竄入シ忽チ患者ハ呼吸困難ノ狀ヲ呈シ顔面藍紫色ニ變シ脉

静脈ノ結紮

空氣竄入ノ症候



死因

搏不正ト爲リ四肢痙攣狀ニ收縮シ遂ニ窒息セントスルノ状態ニ陥ル即チ呼吸ハ間絶シテ心部ニ一種ノ雜音ヲ聽キ心收縮不正ト爲ル而シテ空氣ノ靜脈ニ吸收セラレシ者ハ心臟ニ至リ堆積シテ大ナル氣胞ヲ形成シ心收縮及ヒ開張不全ヲ來シ右心ハ空氣ヲ以テ充滿シ血液還入スル能ハス遂ニ心臟麻痺ヲ來シテ死ヲ致ス者ト爲ス

**療法** 靜脈損傷ニ在リテハ直ニ壓迫ヲ加ヘテ空氣ノ滲入ヲ防キ若シ外頸靜脈ノ如キ大管ヲ切ルキハ最モ注意シテ壓抵シ後之ヲ結紮スヘシ又一旦空氣吸入シ危險ノ症狀ヲ呈スルニ於テハ人工呼吸法ヲ施シ又靜脈ノ切斷端ヲ開キ胸廓ヲ壓迫シ人工呼吸法ヲ以テ空氣ヲ驅出ス或ハ尺澤ニ於テ中靜脈ニ「カニューレ」ヲ入レ空氣ヲ吸出スルヲ試ミタルモ其成功確實ナラス少量ノ空氣滲入シタルキハ漸々消失シテ危險ナラス然レモ其量二百瓦以上ニ及フキハ死ヲ免ルハ不能ハス

血栓

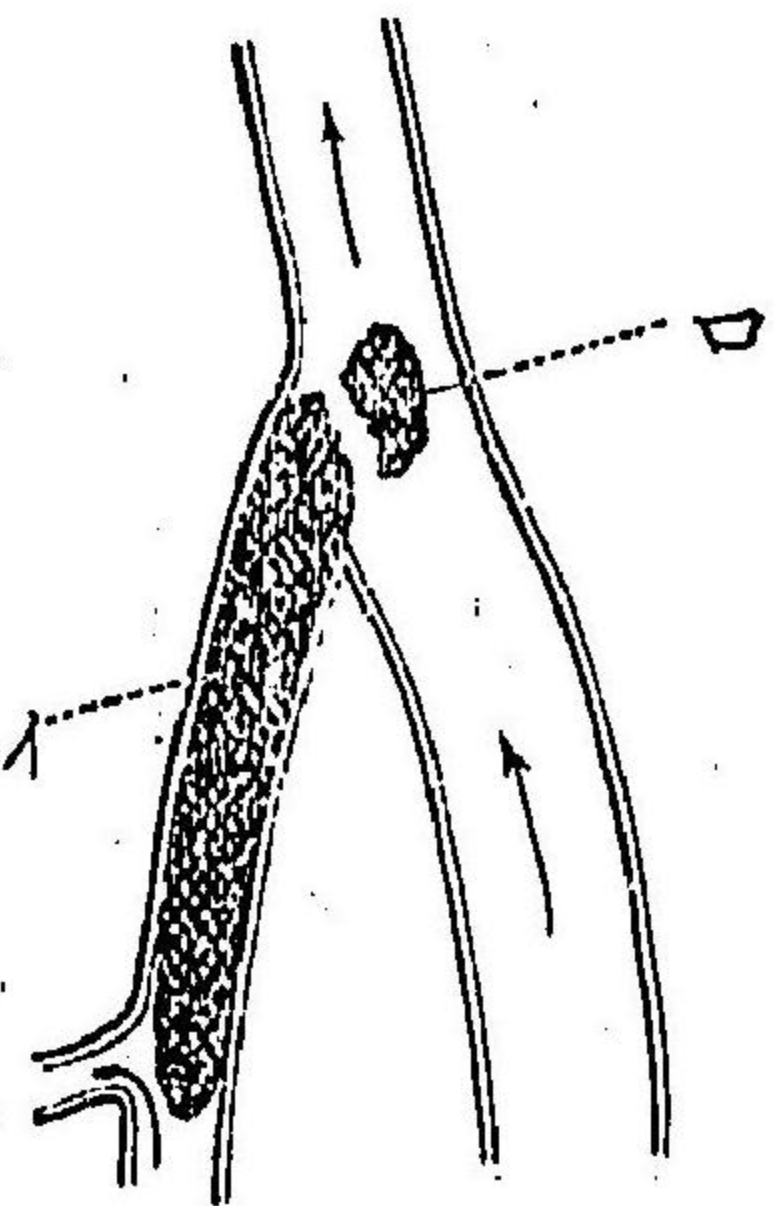
血栓 Thrombose チ區別シテ管壁ノ一部分ヲ塞クモノト全腔ヲ塞クモノトニアリ而シテ血栓ハ動脈及ヒ靜脈ニ生スルモ靜脈血栓ハ動

第五十六圖

(イ) 靜脈血栓

(ロ) 其一片離

斷セル者



脈血栓ニ比スレハ其害甚シ是レ靜脈血栓(第五十六圖(イ)ハ漸次増大シ索條ヲ爲シテ其本幹内ニ延長シ以テ數多ノ靜脈ヲ堵塞スルニ至ル加

之血栓ノ大幹内ニ突出スル者ハ容易ニ離斷シテ(第五十六圖(ロ)其一片血行ニ沿テ下大靜脈ヲ經テ心臟ニ入り遂ニ肺腦等ニ達シ該部ノ毛細管ヲ栓鎖スルヲ以テナリ

**原因** 内膜ノ變化外傷壓迫等ニシテ例之ハ腫瘍ノ爲メニ靜脈壓迫



セラレ兩壁相摩擦スルニ於テ、内膜ノ變化ヲ起シ血栓ヲ生ス。壓迫性血栓 Compression thrombose ト稱ス。又腫脹セル鼠蹊淋巴腺ニ壓セラレ、窩微靜脈ニ血栓ヲ生スルガ如キ其一例ナリ。又衰弱ノ爲メ血行徐々ト爲リ、遂ニ靜脈瓣ニ血栓ヲ生スルヲアリ。衰弱性血栓 Marantische Thrombose ト稱ス。是レ四肢ノ末端ニ於テ血壓弱ナル部ニ見ル。即チ久シク病床ニ臥セル者ノ窩微靜脈ニ生シ、夫ヨリ股靜脈ニ波及シ、又外腸骨靜脈ニ連進スル者アリ。其他血液ノ凝固ヲ促ス一半格魯兒鉄溶液等ノ爲メニ生スルヲアリ。

栓塞

栓塞 Embolie トハ數種ノ物質血行ニ沿テ循環シ、動脈、靜脈及ヒ毛細管ニ入り、茲ニ止マル者ヲ云フ。而シテ之ヲ爲スノ原因數種アリ。

(一) 血栓ノ一片離斷シ、血行ト共ニ流テ血管ヲ通過シ、該部ニ拮止スル者

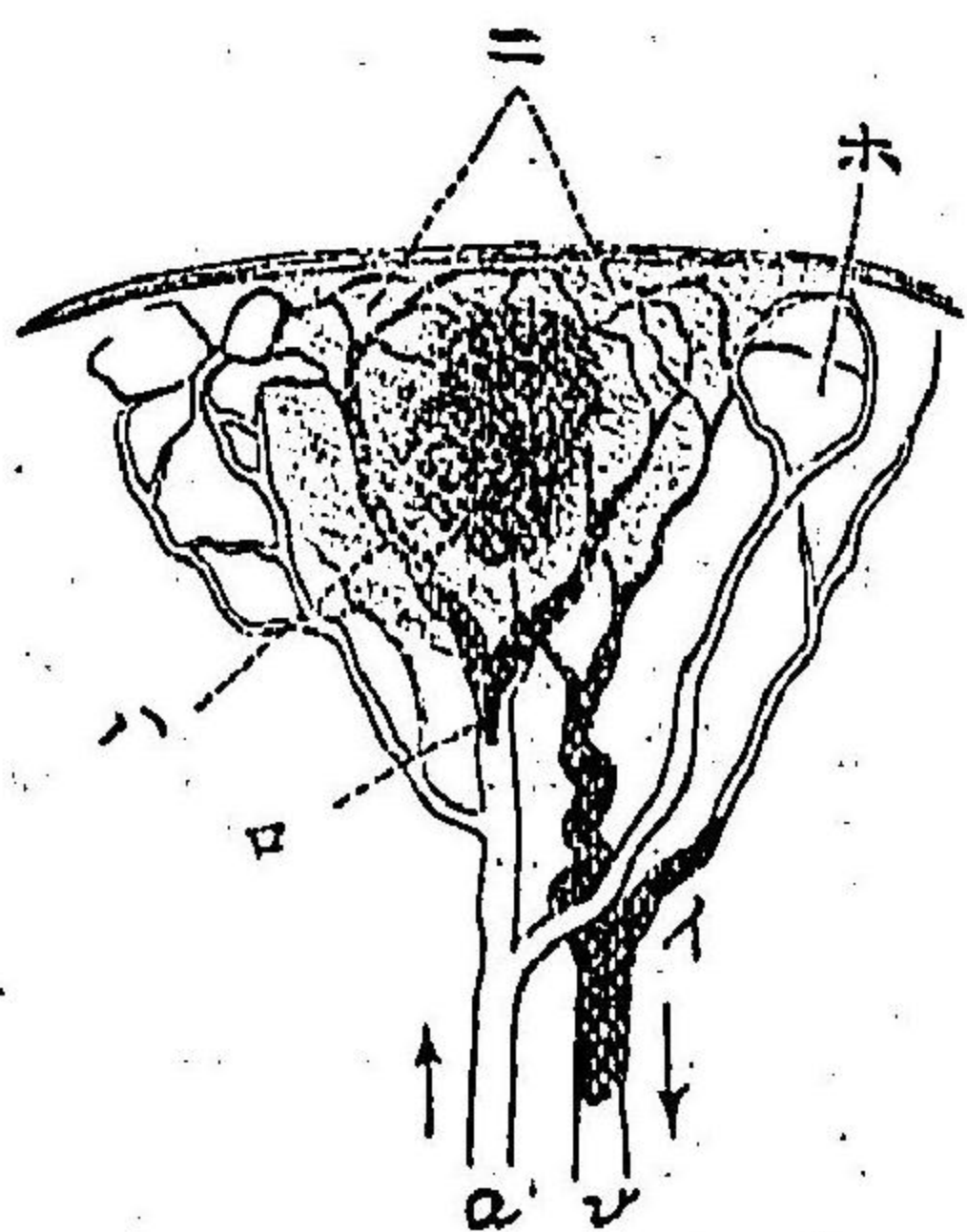
- (二) 動脈アテローム[變性シテ糜爛様軟化シタル者]
  - (三) 脈管壁周圍ニ悪性ノ腫瘍發生シテ、管壁ヲ侵蝕破潰シ、腫瘍ノ碎片血行ニ隨テ内臓器ニ至リ、毛細管ヲ閉塞セル者
  - (四) 血液中ニ存生スル寄生虫例之ハ糸狀虫或ハヒラリヤ[罕レニハ肝臟]、デストマ[卵子血中ニ混シテ栓塞ノ原因ト爲ル]
  - (五) 脂肪球是レ骨折傷ニ於テ骨髓ヨリ遊離シ、血管中ニ入ル
  - (六) 膿球 (七) 空氣胞等是レナリ
- 栓塞ノ結果** 其原因ノ持續スル時間ノ長短ニ關シ、若シ久時持續スルキハ種々ノ症狀ヲ呈ス。脂肪膿球等ハ其拮止スルヲ暫時ノ後再ヒ排除セララル、モ腫瘍ノ碎片等ハ長ク留マル者ナリ。而シテ小動脈ノ栓塞ヲ生スルキハ其分布區域内ニ貧血ヲ來スモ、暫時ニシテ消散ス。獨リ盲末動脈(第五十七圖a) Endarterienニ在リテ、エンボリー(閉)ヲ生シ、其閉塞ヲ來スキハ其分布區域内ハ貧血シ、血壓頓ニ下降スルヲ以テ



吸引作用ヲ起シ静脈(V)ハ却テ充血シ屢シ静脈血動脈枝中ニ逆流シ充  
脹(H)其度ヲ超エ静脈血壓頓ニ上昇シ毛細管破綻シテ出血ヲ致ス而

第五十七圖

- (a) 動脈 (v) 静脈 (イ) 血栓
- (ロ) 栓塞 (ハ) 梗塞ノ中心膿
- 潰セル部 (ニ) 漿液滲出セ
- ル部 (ホ) 副枝充血ヲ呈セ
- ル部



ノ此溢血  
ノ壓迫ニ  
由リ組織  
ノ一片壞  
死シ或ハ  
腐敗性エ  
ンボリー

楔狀梗塞

ニ在リテハ膿潰スル者ト爲ス(第五十七圖ハ)出血性梗塞 Haemorrhagi-  
scher Infarct 或ハ單ニ楔狀出血ト名クル者即チ是レナリ屢シ肺脾肝腎腦  
等ニ生シ毎ニ表部ニ發生ス而シテ出血性インハルクト「楔狀」ヲ呈スル  
ハ蓋シ盲末動脈分枝ノ形狀ニ一致スル者ニシテ其楔狀ノ尖端ハ動

脈ノ閉塞部ニ當リ其基底ハ其分布區ニ符合スル者ナリ(第五十七圖)  
腐敗性エンボリーナル者ハエンボリーノ中ニ腐敗毒ヲ含蓄シ肺腎  
肝等至ル所ニ膿瘍ヲ發ス是レ膿毒症ニ於テ屢見ル所ナリ又皮下靜  
脈ニエンボリーヲ生シ許多ノ膿瘍ヲ發スルコトアリ又大ナル腎動脈  
等ニエンボリーヲ生スレハ偏側ノ腎壞疽ニ陥ル又大ナル肺動脈ニ  
「エンボリー」ヲ生スレハ呼吸困難ヲ來ス腦ニエンボリーヲ生スルキ  
ハ或ハ麻痺或ハ痙攣ヲ來シ或ハ腦質ニ膿瘍ヲ發スルコトアリ  
療法 主トシテ豫防法ニアリ即チ靜脈ノ損傷ヲ避ケ若シ損傷ヲ生  
スルモ十分防腐ヲ嚴ニシテ有毒性エンボリーノ生スルヲ避ケルコ  
アリ輒近防腐療法ノ行ハレシ以來膿毒症ハ殆ント全ク消滅ニ歸セ  
リ

脂肪「エンボリー」 Fettembolie 是レ流動性エンボリーニシテ骨折  
傷ニ由リテ骨髓ノ挫滅セルキニ來ル蓋シ骨髓ノ脂肪ハ遊離シテ淋



巴管ニ吸收セラレ次テ静脈ニ入り血行ト共ニ循環シ下大静脈ニ入  
 リ右心ニ來リ肺動脈ニ流注シ毛細管栓塞ヲ爲スモノナリ故ニ脂肪  
 ノ一部ハ肺血行ニ入り「エンボリ」ヲ生シ一部ハ肺ヲ通過シテ左心  
 ニ來リ次テ腦腎脾肝等ノ内臓器ニ至リ同シク「エンボリ」ヲ生ス腎  
 ノマルビギー氏小體中毛細管ニ於テ多クノ脂肪球ヲ發見ス而シテ該  
 脂肪球ハ尿ト共ニ排泄セラルハモハナルヲ以テ骨折傷ニ在リテ屢  
 脂肪尿ヲ併發ス而シテ脂肪ノ尿中ニ現出スルハ間歇性ニシテ二日位  
 ナ隔テ、來ル肺及ヒ腦動脈ヲ栓閉セル者漸次遊離シテ腎ニ來ルガ  
 故ナリ腦動脈ノ分枝多ク閉塞セラルハ其ハ腦貧血ヲ起シ四肢痙攣  
 呼吸困難體温下降等ノ諸症ヲ來ス吾師スクリバ氏 Scriba ハ一千七  
 百九十年脂肪「エンボリ」ノ研究ニ關スル著述ヲ公ニシ右ノ所述ヲ  
 明ニセリ

静脈炎或ハ静脈周圍炎 Phlebitis od. Periphlebitis

是レ急性ニシテ多ク静脈周圍ノ炎症ヨリ續發シ來リ又稀レニ静脈  
 内ニ腐敗性「エンボリ」ヲ生シ炎症ヲ發シテ其周圍ニ及スモノアリ  
 静脈炎ヲ起スニハ壁ヲ刺戟スル固有ノ微菌アリト云フモ未ク確實  
 ナラス四肢ノ末端ニ炎症ヲ發スルキハ皮下表在静脈ニ沿フテ帶青  
 藍色ノ紅線ヲ呈ス之ニ觸接スレバ疼痛ヲ覺ニ若シ輕症ナレハ紅線  
 ハ一二日ヲ經テ消散スルモ重症ナルキハ静脈ノ周圍ニ膿瘍ヲ造作  
 シ患者ハ發熱シ稀レニハ惡寒ヲ發ス此症ハ淋巴管炎ト誤ルヲアリ  
 然レモ淋巴管炎ニ在リテハ淋巴腺ノ腫脹ヲ見ルヲ以テ鑑別シ易シ  
 例之ハ下肢ナレハ鼠蹊腺腫脹シ上肢ナレハ腋窩腺腫脹スルカ如シ  
 療法 身體諸部ニ損傷ヲ生シタルキハ消毒ヲ嚴クシ静脈炎ヲ豫防  
 スヘシ若シ是レヲ發シタルキハ灰白軟膏ヲ塗布シ防腐帶ヲ貼附セ  
 ハ漸ク疼痛ヲ減シ二三日ニシテ治ス  
 静脈炎慢性ト爲ルキハ管壁肥厚彎曲シ往々静脈中ニ石灰沈澱ヲ生



シ○靜○脈○石○ヲ○生○シ○或○ハ○血○栓○ヲ○生○ス○ル○ノ○原○因○ト○爲○ル○コ○ト○アリ○故○ニ○靜○脈○炎○ハ○或○ハ○血○栓○ノ○續○發○症○ト○爲○リ○或○ハ○靜○脈○炎○ヨリ○血○栓○ヲ○續○發○ス

靜脈瘤或ハ靜脈擴張 Varix

靜脈壁肥厚シ殊ニ結締織増殖シテ延長且ツ彎曲シ血栓ヲ生シ易ク  
隨テ「トロンブス」ノ一片游離シテ危險ノ症ヲ起ス「アリ」又炭酸加兒  
基磷酸加兒基等ヨリ成ル靜脈結石ヲ作ル「アリ」殊ニ起立歩行ノ作  
業ハ靜脈瘤ヲ生シ易ク本邦ニテハ痔靜脈ノ擴張頗ル多クシテ歐洲  
ニテハ下肢ニ多ク其表在靜脈ニ鬱血ヲ來シ漿液滲潤シテ浮腫ヲ呈  
シ皮下結締織増殖シ爲メニ皮膚肥厚シ象皮病ヲ誘發スル「アリ」又  
靜脈鬱血ニヨリ下腿ニ潰瘍ヲ呈ス下腿潰瘍或ハ靜脈瘤性潰瘍 Varix  
cose Geschwüre ト稱ス潰瘍面ハ絶ヘス漿液ヲ分泌シ屢脈管破裂シテ  
出血ヲ致ス皮膚ハ肥厚シ共ニ炎症ニ陥リ固ク壓骨ト癒着シ容易ニ  
移動セサルヲ以テ潰瘍ハ痊愈難久スル者ナリ

療法

- (一) 下肢ヲ安靜ニシ高ク提舉シ且ツ壓迫法ヲ施シ彈力帶ヲ以テ  
縛ス然ルルハ血液表在靜脈ヨリ深在靜脈ニ輸送セラレ鬱血消  
退ス然レモ劇度ニ縛スルルハ動脈モ共ニ壓セラル、ノ恐アリ故  
ニ注意シテ晝間動作中ハ之ヲ施シ夜中ハ之ヲ脱スルヲ良ト爲ス此  
等ノ方法其効ヲ奏セサルルハ
- (二) 手術ヲ要ス即チ數所ニ於テ縞襪靜脈ノ皮下結紮ヲ施シ防腐繃帶  
ヲ貼シ二週間ハ安臥セシムルヲ要ス
- (三) 環狀切開潰瘍ノ周圍ニ於テ健全ナル皮膚ヲ環狀ニ切開シ皮膚ヲ  
シテ移動シ易カラシメ且ツ銳匙ヲ用ヰテ潰瘍面ヲ擦去スルルハ漸  
々良性ノ肉芽ヲ發生シテ治ニ就クモノト爲ス其際防腐法ノ嚴ナラ  
ン「コト」ヲ要スルヤ明ナリ
- (四) 摘出法最モ成効確實ノ法ニシテ痔靜脈擴張ニ在リテハ常ニ之ヲ  
稱用ス而シテ此際決シテ利及チ用フル「コト」ナク「パクリーン」氏燒灼器或



ハミットルドルフ氏電氣燒灼器ヲ使用スヘシ此等ノ器ヲ用ヰテ燒斷  
スルキハ燒痂ヲ結成シ出血ノ恐ナク且ツ防腐確實ナリトス

第五編 淋巴管ノ疾病

淋巴管 Lymphgefäss ハ瓣膜ヲ有シ鏈鎖狀ノ膨脹ヲ呈ス而シテ其始メ組  
織間ノ空隙ニ發シテ遂ニ淋巴腺ニ集合スル者ニシテ組織間ノ異物  
ヲ吸收シ之ヲ腺ニ致シテ濾過スルノ作用アリ故ニ墨刺術ニ在リテ  
ハ朱ノ碎片淋巴管ニ吸收セラレテ腺ニ堆積スル者ト爲ス

淋巴管ノ損傷

血管ヲ損傷スルキハ必ス淋巴管ヲモ損傷スルモノニシテ其液ノ漏  
出スルハ血液ト同時ニ在リ而シテ淋巴液凝固シテ淋巴管ノ「トロンボ  
ーゼ」ヲ生ス殊ニ大腿ノ内側ニ於テ此種ノ「トロンボーゼ」ヲ見ルコト  
アリ若シ之ヲ生セサルキハ液ハ絶ヘス漏出シテ淋巴漏 Lymphorrhagic  
ヲ起ス者ナリ是レ淋巴管ノ發育多ク且ツ増殖シタル部ニ來リ屢々大  
腿ノ内側ニ於テ之ヲ見ル而シテ透明ニシテ粘稠ナル液ヲ漏シ往々多  
量ヲ失フコトアリ



豫後 ハ出血ト同シク不良ナレハ等開ニ附スヘカラス本症ヲ永ク  
放置スルキハ瘻孔ヨリ毒質ヲ吸收シテ患者ハ結核性勞質ニ陥ルノ  
恐レアリ

療法 パンクリン氏燒灼器ヲ以テ患部ヲ燒燼スルヲ要ス是レ淋巴  
管腫ノ療法ト同法ニシテ瘻痕ヲ殘シテ治ス

淋巴管ノ炎症 Lymphangitis

是レ淋巴管ノ周圍炎ニシテ管中多クハトロンボーゼヲ生ス而ノ或  
ハ發熱シ或ハ發熱ナク皮膚ニ紅線ヲ呈シ其線ニ沿フテ疼痛アリ而  
ノ其常ニ淋巴腺ニ傳播シ腺ハ腫脹シ疼痛ヲ呈スルヲ以テ容易ニ靜  
脈炎ト鑑別シ得ル者ナリ炎症劇甚ナルキハ屢淋巴管ニ沿フテ膿瘍  
ヲ生シ淋巴腺共ニ膿潰スルコアリ

原因 多ク被毒創傷ニ原因シ(一)不潔ノ器械ニ由リテ外傷ヲ受ケタ  
ルキ是レ催炎性有機生体ノ侵入スルカ爲メナリ

(二)毒性アルカロイドノ入ルキ

(三)動物ノ咬傷殊ニ人類犬馬咬傷ニ發シ其亢奮シタルキハ毒性最モ  
劇烈ナル者ト爲ス

療法 原因ニ隨ヒテ異ナレモ先ツ患部ヲ消毒シ紅線ニ沿テ水銀軟

膏ヲ塗布シ且ツ鼻丞ガ一ゼヲ貼ス咬傷ニ在リテハ口ヲ以テ直ニ吸  
出シ其毒ヲ創部ヨリ去ル又帶ヲ以テ中心部ヲ縛縛シ毒質ノ吸收ヲ  
防シ或ハ利刃ヲ以テ患部ヲ切去シ皮膚及ヒ肉質ヲ摘除スルカ或ハ  
パンクリン氏燒灼器ヲ用非テ毒質ヲ消滅セシムルハ良法ナリ毒蛇  
ノ咬傷ヲ受ケタルキハ酒精特效ヲ奏ス多量ノ酒精ヲ與フルモ患者  
輒ク酩酊セサル者ナリ

淋巴腺炎 Lymphadenitis

腺ハ淋巴液ヲ濾過シ旁ヲ淋巴球ヲ新生スル器ニシテ其中ニ濾胞ア  
リ濾胞ハ網狀結締組織ヨリ成リ其眼内ニ無數ノ淋巴球ヲ含有ス



若シ淋巴球ヨリ其容積ノ大ナル者ハ其液胞中ニ滯積セサルヲ得ス  
故ニ淋巴腺炎ハ殆ント初發スルヲナク通例他部ニ其炎源ヲ有スル  
者タリ

炎性ニ急慢二性ノ別アリ

### 急性淋巴腺炎

多ク有毒性ノ炎源ヨリ傳發シ屢々化膿シ終ニ破潰スルヲアリ彼ノ瘰  
毒下疳ニ因スル横痃(Bubo)ノ如キハ其適例ナリ之ヲ截割スルニ充血  
溷濁ヲ生シ後ニハ黄色ノ斑點ヲ呈シ終ニ膿潰スルニ至ル故ニ一回  
破潰スルキハ必ス其周圍炎ヲ起ス茲ニ形成セシ膿瘍ハ甚々治シ難  
ク一二年ヲ經過スルヲアリ或ハ其膿汁粘稠ト爲リ終ニ乾酪樣變性  
ヲ致ス殊ニ結核ニ於テ然リ或ハ炎症吸收セラレ異狀ヲ殘サスシテ  
治ニ就クヲ屢々ナリ

療法 (一) 淋疾下疳等ヨリ來ルモノハ其原患ヲ除キ細菌ヨリ來ルモ

ノモ亦然リ  
(二) 局所療法腫脹疼痛等ヲ退却セシムルニハ沃度丁幾塗布屢効ヲ奏  
ス若シ効ナクシテ漸ク波動ヲ呈スルニ至レハ切開シテ膿ヲ泄シ防  
腐ヲ嚴ニスヘシ即チ毛髮ヲ生セル部ハ之ヲ剃リ消毒液ヲ以テ洗滌  
スルノ後切開シテ其膿ヲ排泄シ格魯兒亞鉛ヲ腐蝕シ排膿管或ハ  
沃度仿ガ―ゼヲ挿入ス乾酪變性ニ在リテハ切開ヲ加ヘ更ニ銳匙ヲ  
以テ搔抓スヘシ

### 慢性淋巴腺炎

第一腺病性淋巴腺炎 Lymphadenitis scrophulosa ニシテ小圓細胞ヨリ  
成リ腺ハ慢性ニ腫脹シ疼痛甚々微ニシテ漸々肥大シ遂ニ膿ヲ醸シ  
荏苒之ヲ排泄スルモノナリ腺病性小兒ノ頸腺ニ最モ多シ屢々頭皮ノ  
發疹ニ續發シ又口腔耳等ノ粘膜炎ニ合併スルモノナリ  
此腺炎ハ往々膿潰或ハ乾酪性ニ變ス之ヲ截割スルニ液胞及ヒ其索



條ハ増大シ圓形細胞ノ數夥シク増加ス  
 第二結核性淋巴腺炎 *L. tuberculosa* ハ一名巨胞性淋巴腺炎ト稱ス内  
 ニ硬固ナル小結節ヲ生シ名ツケテ結核ト云フ常ニ巨胞ヲ包藏シ乾  
 酪樣變性ニ陥ルコト多シ  
 第三硬結性淋巴腺炎 *L. indurativa* ハ全腺肥大且ツ硬結スルノ症ニシ  
 テ決シテ膿潰又ハ乾酪變性ヲ營ムコトナク或ハ自發性ニ來リ或ハ梅  
 毒性ヨリ來リ頸肘鼠蹊部等ノ腺必ス腫脹シテ硬結ス鶏卵大乃至鳩  
 卵大或ハ豌豆大ニシテ數年間持續シ容易ニ治ニ赴カサル者ナリ  
 療法 第一原因療法ヲ施ス結核性ニ在リテハ結核ヲ治シ小兒ノ腺  
 病ニ在リテハ成年ニ達セサル前ニ療スベシ即チ營養運動攝生法海  
 水浴等ヲ行ヒ專ラ體力ヲ増療スルニ在リ内服ニハ沃度鉄舍利別  
 ルツ越幾斯ヲ投シ局所ニハ吸收藥即チ實斐答里斯軟膏沃度加里軟  
 膏等ヲ腫脹腺部ニ塗布ス右ノ諸法ニ於ケルモ其効ナク膿潰或ハ乾

酪變性ヲ來タスルハ摘出術ヲ行フ其法皮膚ヲ切開シテ腺ノ周圍結  
 締織ニ達シ腺ノ包膜ヲ破ラズシテ鈍力ヲ用キ全腺ヲ摘出スルコト  
 リ殊ニ化膿性炎ニ在リテハ醜畸ナル瘻痕ヲ殘スヲ以テ可及的速ニ  
 切開シ排膿ヲ促シ硬結性炎ニ在リテハ驅梅毒療法ヲ施スヲ要ス

淋巴腺新生物

淋巴腺ニ生スル新生物ヲ大別シテ二種ト爲ス一ハ淋巴腺ノ官能障  
 害セラレサル者ニシテ一ハ官能障害セラレ、者ナリ甲ニ屬スルモ  
 ノハ淋巴腺ノ組織肥大シ網狀結締織淋巴液及ヒ淋巴球等頗ル増加  
 スル者ニシテ白血性淋巴腺腫 *Lymphadenitis leucaemica* ト云フ本症ニ  
 在リテハ血液中ニ白血球増加シテ脾臟肥大シ腺ハ決シテ膿潰スル  
 コトナシ乙ハ網狀組織ノ新生スル者ニシテ其官能障害セラレ惡性淋  
 巴腺腫 *Lymphadenitis maligna* 是レナリ其經過迅速ニシテ頸腺ニ發シ  
 漸次胸腔ニ増大進入シ肺ヲ壓迫スルニ至ル而シテ此腺腫ハ膿潰シテ



醜畸ナル瘰癧ヲ結成スルヲ通例ト爲ス甚シク増大スルニ於テハ速ニ死ヲ招クアリ

療法 悪性淋巴腺腫ニホーレル水頗ル効アリ或ハ砒石丸ヲ用フ一九ノ量ハ〇〇〇一ニシテ一日三回毎食後ニ用ユ漸々増量シテ一日十五粒迄用ユルモ可ナリ而ノ半年間モ持續スルアリ其經過中ニ消化不良ヲ來スキハ其數ヲ減スヘシ

處方 (1) 亞砒酸〇一甘草末一〇〇

右爲百丸

増丸ノ順序ハ左ノ如シ

III	三日間
121	次ノ三日間
221	" "
222	" "
232	" "
233	" "
333	" "
343	" "
344	" "
444	" "
...	" "

(2) ホーレル水ハ一日十ml—三十ml—五十ml 又注射スルモ奏効アリ

淋巴腺肉腫 腺内ニ悪性肉腫ヲ發生セル者ニシテ屢幼年者ノ頸部ニ發ス往々數個連珠狀ト爲リ急性ニ増大シテ頗ル悪性ナリ

療法 摘出スヘシ

淋巴腺癌腫 多シハ續發性ニ來ルモノニシテ内臟癌腫ノ診斷ニ必要ナリ癌細胞ハ淋巴管ニ入り腺ヲ通過スルノ際濾胞中ニ濾過セラレテ沈着シ次テ再ヒ癌腫ニ發育シ此症ヲ起スモノナリ

療法 摘出スルモ効ナシ是レ癌第二ノ發生地ナレハナリ

外科通論中編終



外科通論中編正誤

所在

誤

正

百三十五丁十二行

炭

炭

百七十四丁十行

Petit, schr äubentourniquet

Petit's Schraubentourniquet

百七十四丁十二行

ハ

削除ス

二百二丁十二行

有

削除ス

ドントル、スクリバ氏ノ序文ハ都合ニヨリ中編ニ載スルヲ止メリ讀者之ヲ諒セヨ



全 明治廿三年四月二十日印刷  
年全月廿一日出版

定價金八拾五錢

版權所有  
新 録

著者兼  
發行人

福島縣平民

芳賀榮次郎

東京市本郷區元町二丁目  
四拾八番地

印刷所

藥研堀活版所

東京市日本橋區藥研堀町  
三十三番地

印刷人

木元由太郎

全所

發兌書肆

島村利助

全市全區馬喰町二丁目



實 捌 所

本郷春木町二丁目 島 村 支 店  
 日本橋通三丁目 丸 家 善 七  
 湯島切通シ坂町 南 江 堂  
 全 金 原 寅 作  
 大坂心齋橋筋一丁目 松 村 九 兵 衛

醫學士芳賀榮次郎先生著

外 科 通 論

創傷論 炎症論 防腐療法 麻醉法 精圖三十個入 定價金五十五錢  
 中 編 既 成 下 編 近 刻

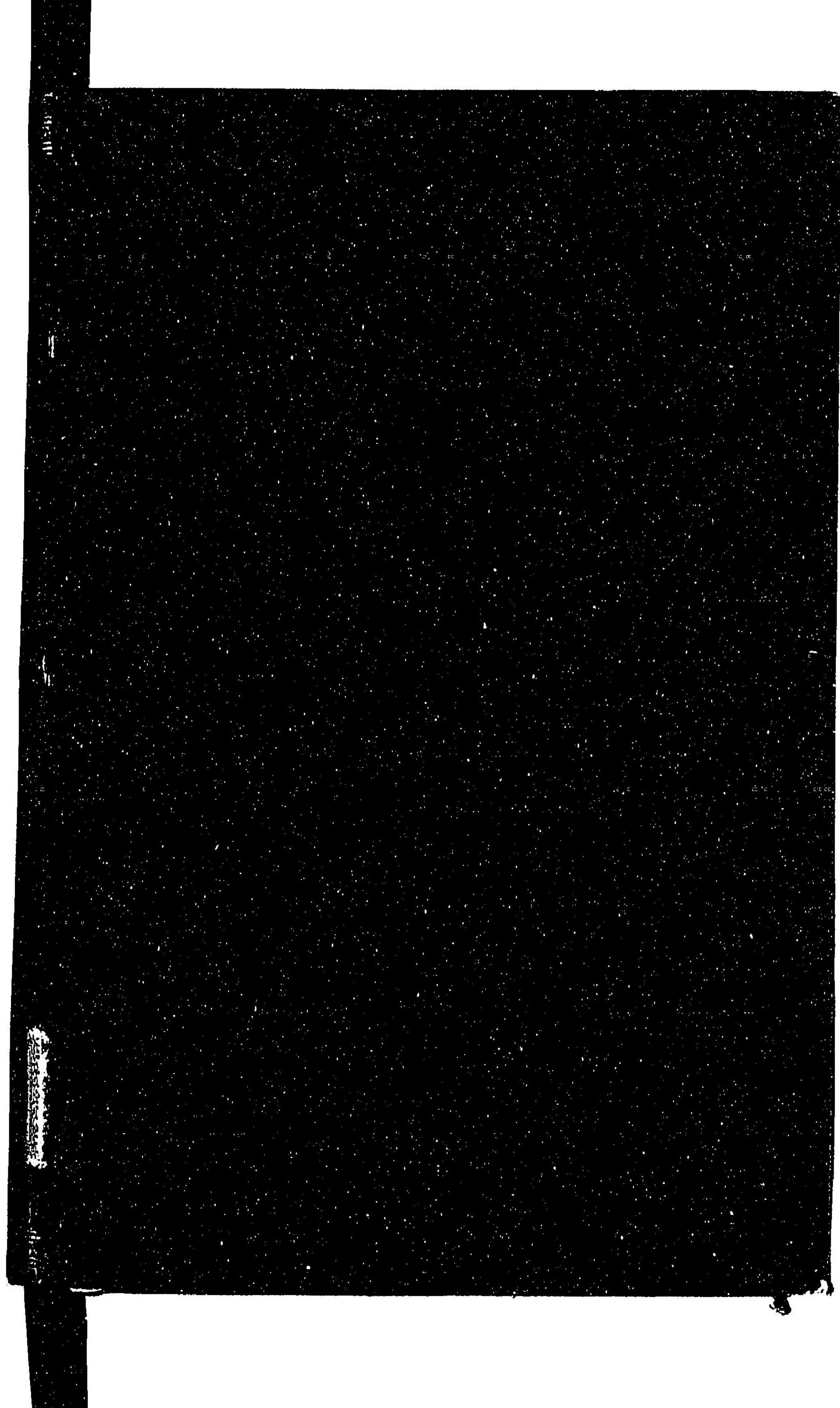
本書ハ著者カ多年醫科大學外科部ドクトル、スクリヤ氏「クリニク」ニ在リテ實驗セル者ニ基キ  
 專ラ日本外科ヲ基礎トシテ編述セラレン者ニシテ其所說斬新精確務メテ煩ヲ変リ要ヲ摘ミ學理  
 實地兩ラ最モ記憶ニ適切セリ世ノ醫士及醫學生諸彦ニシテ苟モ日本外科ノ眞像ヲ瞰ヒ以テ腕近  
 外科學ノ進歩ニ週レサラント欲セハ必ス熟讀スヘキノ良書ナリ

東京馬喰町二丁目 島 村 利 助



54  
別庫  
61







54  
67

059644-001-6

54-61

外科通論

芳賀 栄次郎/著

M23

CBH-0282





